

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成30年6月6日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370050

研究課題名(和文) 『古逸叢書』の編纂・出版およびそのテキストの研究

研究課題名(英文) The Study of Compilation and publication of Gu Yi Cong Shu and Research on its Text

研究代表者

陳捷(CHEN, Jie)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授

研究者番号：40318580

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：『古逸叢書』は近代以降の中国古典籍研究と影印出版事業に大きな影響を与えたのに関わらず、その編纂、出版及びテキストの問題については個別の研究を除き、系統的な研究は未だになされていない。本研究はこの懸案の解明を目指すものであり、地道な文献考証を通してこの歴史・思想・文学などの多分野にわたる基本文献の本文の性質を正確に捉え、底本選択、校勘作業におけるさまざまな問題を十分把握しないうままに研究の基本テキストとして使用するといった現状を是正するものである。なお、本叢書の編纂と出版とに対する日本人学者の協力や刊刻技術に関する考察は、近代日中両国間の学術史の新発見へと誘うものであり、重要な意義を有している。

研究成果の概要(英文)：Gu Yi Cong Shu is the book that influenced the research of ancient history book and the publishing business since the modern era greatly ,but unfortunately ,except for individual research on compilation, publication and text issues,systematic research has not been done yet. In this research, we make concrete discussion, accurately grasp the properties of this document, in addition, we also discussed the cooperation of Japanese scholars on compilation and publication of this book series.

研究分野：中国思想

キーワード：『古逸叢書』 日中文化交流 書籍交流

1. 研究開始当初の背景

近代以降に出版された夥しい中国古典籍の影印本のうち、清国駐日公使として来日した黎庶昌および公使館随員の楊守敬が日本滞在中に編纂、出版した『古逸叢書』は特筆すべき存在である。旧鈔本『玉燭宝典』、旧鈔本『文館詞林』、北宋版『姓解』、宋版『史略』、宋本『南華真經注疏』、宋版『太平寰宇記』など、中国ではすでに亡佚した書物や貴重なテキストを含む 25 種の漢籍および『日本国見在書目』の、計 26 種を収め、当時の日本におけるもっとも優れた彫り師たちに依頼して木版印刷によって影刻出版を行い、同時代の中国の学者の間において大きな反響を引き起こしたのみではなく、それ以降の中国古典籍研究および影印出版事業に対しても大きな影響を与えている。『古逸叢書』の版木は中国に持ち帰られ、その後も補修して重ねて印刷がなされており、また影印本やそのうちの一部を単行本として影印出版したものが広範囲において流布している。収められているテキストの多くは良いテキストとされ、未だに古典籍校勘・翻刻の際の底本や校本として利用されている。

しかしながら、出版当時の編纂過程については不明な点も多く、そのテキストに対しては、未だに十分な検討がなされていない。例えば、所収書のテキストの底本が、確かに編者が称しているものかどうか、本文は底本を忠実に影刻したものであるかどうか、さらに、底本の文字を改めている場合には、どのような校本により、どのような校訂過程を経て直したのかなど、注意深い校勘作業と周到な版本調査を通して究明すべきことが多いものと思われる。

『古逸叢書』の編纂およびテキストの問題に関して長澤規矩也氏は、1974 年に記した「『古逸叢書』の信憑性について」(『宇野哲人先生白寿祝賀記念東洋学論叢』所収)と題する短い論文において、『古逸叢書』においては底本の文字を断りなく改めるような現象が見られるため、必ずしも完全に信頼できるものではないことを指摘しているが、残念ながら、その見解は十分活かされておらず、『古逸叢書』本文に対する本格的な考察は未だに行われていない。

また、筆者は以前『明治前期日中学術交流の研究 清国駐日公使館の文化活動』(汲古書院、2002)において、清国公使および公使館スタッフたちの文化活動を考察した際に、『古逸叢書』の編纂・出版の際の黎庶昌と楊守敬の二人の役割に関して、従来の過ちを正し、さらに、『古逸叢書』の出版過程における日本人学者・彫師たちとの交流などについて、新発見の一次資料を利用し

て分析し、ある程度は解明したが、当時の研究テーマの主旨からして、編纂・校勘過程における底本・校本選択の問題や本文校訂の問題などに関しては充分に取り込むことができなかった。そのため、その後の研究においてはこの課題を心に留めており、資料を集めてきたが、今回はこれらの問題に正面から取り組もうと考えていた。

2. 研究の目的

『古逸叢書』は近代以降の中国古典籍研究および影印出版事業に大きな影響を与えたのにもかかわらず、その編纂、出版およびテキストの問題などについては個別の研究を除き、系統的な研究は未だになされていない。

本研究はこの近代における古典籍研究史上の懸案の解明を目指すものであり、地道な文献考証を通してこの歴史・思想・文学などの多方面にわたる基本文献の本文の性質を正確に捉えるのみならず、『古逸叢書』の底本選択、校勘作業におけるさまざまな問題を十分把握しないまままで研究の基本テキストとして使用している現状を是正するものである。

また、『古逸叢書』の編纂と出版とに対する日本人学者の協力や刊刻技術に関する考察は、近代日中両国間の学術史・技術交流史に関連する新たな発見へと誘うものであり、重要な意義を有するものと思われるのである。

3. 研究の方法

本研究は文献学の方法を用いて『古逸叢書』の編纂・出版における日本人学者・印刷業者との交流、校勘作業の手法、編纂・校勘の際に使用された底本・校本、さらには刊刻・印刷の際の技術的な特徴などについて系統的に考察・分析を行い、その本文の性質を正確に把握し、この近代における古典籍研究史上の懸案の解明を目指すものである。

研究の方法としては、まず先人の研究を踏まえながら、その後の新出資料を利用して、『古逸叢書』の編纂と出版とに対する日本人学者の協力の具体相について考察を行う。

また、今日までの、近代以降における日中両国の古典籍の移動に関する研究から得た知識と中国古典籍の校勘に従事した経験とを活かして、『古逸叢書』の編纂・出版過程および底本の選択・本文校勘などのテキストをめぐる一連の問題を追究・解明する。

具体的には、『古逸叢書』所収の各書のテキストの書誌調査と本文研究とを行い、その編纂・校勘作業に使用されていた底本・校本について究明する。また、各テキスト間の緻密な校合作業や日本・中国に現存する複数の出版当時の校正刷りに対する丹念な考察を通して、『古逸叢書』のテキストとその底本との異同や、当時における校訂作業の手法などを明らかにする。

本研究においては、叢書本の他に、単行本・補修本などについても目配りを欠かさず、さらに、中国に持ち帰られた『古逸叢書』の版木の調査もより本格的に行い、叢書本と単行本、初印本と補修本、後印本などの具体的な流布状況についても検討する。

『古逸叢書』の版下は伝統的な影摹による方法のほか、新しい写真術の使用についても工夫がなされ、刊刻に際しては当時の東京におけるもっとも優秀な彫り師であった木村嘉平らが担当している。これらの技術的な特徴についても、版木の調査を通して明らかにしていきたい。

4. 研究成果

研究期間中に、『古逸叢書』の編纂・出版に関わる基本的な資料を調査、収集し、黎庶昌・楊守敬の著作、古典籍の題跋、書簡、日本人との筆談の記録、総理衙門に提出した公文書、『古逸叢書』の出版事情を知る人物の記録および現存する『古逸叢書』の校正刷りなどの関係情報について調査を行い、『古逸叢書』の編纂・出版の過程についていままで不明瞭の点の解明を務めた。

また、『古逸叢書』所収の各書のテキストの書誌調査を行い、その底本といわれるものや、他のテキストおよび校正刷りとの校合作業を行った。これらの作業により、当時の校訂作業の手法を分析し、校勘時に使われた底本・校本について明らかにした。

これらの調査研究と具体的な校勘作業により、『古逸叢書』の編纂、底本選択の過程については以前より多くの手がかりを得ており、また、各書のテキストについてもいままでよりより明確な認識を得ることができた。さらに、底本入手のルート、模写・写真撮影などの方法、底本を確定した後の刊刻、校勘、校正などの具体的な作業に関わった人々に関する情報もより詳しくなってきた。

現在、研究期間中に蒐集した一次資料を翻刻しており、将来的に資料集として公表したい。また、調査・研究の成果の一部は

論文、学会発表の形で公表しているが、これから引き続き学術論文と研究書の形式で発表・出版したい。なお、『古逸叢書』所収の各書の校勘作業の結果もなお整理・分析しており、将来的に校勘表を作成したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

陳捷、「和刻本の変種 中国に伝わった日本の版木とその摺本について」東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要『文化交流研究』31号、pp.27-36、東京大学文学部次世代人文学開発センター、2018.3

陳捷、「『夢梅華館日記』翻刻(第三十～三十一巻)」、『調査研究報告』第36号、pp.307(1)-278(45)、国文学研究資料館、2016.3

陳捷、「關於宮島誠一郎文書中の筆談資料」、彭小妍主編『翻譯與跨文化流動：知識建構、文本與文體的傳播』、pp.435-458、臺北：中央研究院中國文哲所、2015.10

陳捷、「『夢梅華館日記』翻刻(第二十八～二十九巻)」、『調査研究報告』第35号、pp.117(1)-48(45)、国文学研究資料館、2015.3

陳捷、「シーボルト・コレクションの和刻本漢籍について」、人間文化研究機構国文学研究資料館編『シーボルト日本書籍コレクション 現存書目録と研究』、pp.580-601、勉誠出版、2014.12

[学会発表](計 7 件)

「關於十九世紀後半葉日藏漢籍回流中国的商業渠道」、台北・中央研究院近代史研究所、2016.12.5

「十九世紀日藏漢籍回流与広州」、『2016年古籍版本目録学国際学術会議』、広州・中山大学図書館、2016.11.8-9

「和刻本の変種：流入中国的日本版片及其印本」、『東亜古代雕版印刷与版片国際学術研讨会』、揚州・揚州雕版印刷博物館、2016.10.21-26

「羅振玉旅日時期刊印日藏漢籍事業概観」、「学人羅振玉研討会」、大連・旅順博物館、2016.10.19-20

「中国人外交官が見た明治日本 清国駐日公使館随員孫点の日記を中心として」、東アジア文化交渉学会第8回大会、大阪・関西大学東西文化研究所、2016.5.7-8

「清末銅版『西清古鑑』与日本近代銅版書」、「東方印迹：中韓日雕版印刷国際学術研討会」、北京・北京大学新聞与伝播学院、2015.11.27-29

「京都における羅振玉の日本所蔵漢籍の出版事業について」、京都府立総合資料館・京都府立大学主催総合資料館開館50周年記念国際京都学シンポジウム「近代京都の学と美の新生 - 明治・大正期の日中文化交流の中から - 」、2014・1・11、京都市国際交流会館イベントホール

6. 研究組織

(1) 研究代表者

陳捷 (CHEN, JIE)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：40318580